

海異記

泉鏡花

青空文庫

砂山を細く開いた、両方の裾すそが向いあつて、あたかも二頭の恐
しき獸うずくまの踞うずくまつたような、もうちつとで荒海へ出ようとする、路みちの
傍かたえに、崖がけに添かうて、一軒漁師の小家こいえがある。

崖はそもそも波というものの世を打ちはじめた昔から、がツキ
くろがねくろがねたてつと鉄の楯たてを支ついて、幾億尋ひろとも限り知られぬ、潮うしおの陣じんを防まぎ止とめ
て、崩れかかる雪のごとく鎬しのぎを削る頼母たのもしさ。砂山に生え交まじる、
茅かや、芒すすきはやがて散り、はた年ごとに枯れ果くても、千代ちよ万よろ代ずよの
末すえかけて、巖いわおは松の緑にして、霜にも色は変えないのである。

さればこそ、松五郎。我が勇しき船頭は、波打際の崖をたよりに、お浪という、その美しき恋女房と、愛らしき乳児を残して、日ごとに、件の門の前なる細路へ、衝とその後姿、相對える猛獣の間に突立つよと見れば、直ちに海原に潜るよう、砂山を下りて浜に出て、たちまち荒海を漕ぎ分けて、飛ぶ鷗よりなお高く、見果てぬ雲に隠るるので。

留守はただ磯吹く風に藻屑の匂いの、襷かけたる腕に染むが、浜百合の薫より、空燻より、女房には一際床しく、小児を抱いたり、頬摺したり、子守唄うとうたり、つづれさしたり、はりものしたり、松葉で乾物をあぶりもして、寂しく今日を送る習い。

浪の音には馴なれた身も、鷄とりの音に驚ねきて、児こと添そいぶし臥ふしの夢を破やぶり、門かどひ引きあけて隈くまなき月に虫の音の集すだくにつけ、夫恋よわしき夜半よわの頃、寝衣ねまきに露を置く事あり。もみじのような手を胸に、弥生やよいの花も見ずに過ぎ、若葉の風のたよりも艫ろの声にのみ耳を澄ませば、生憎あやにく待たぬ時ほととぎす鳥。鯨の冬の凄すさまじさは、逆巻さかまきき寄する海の牙きばに、涙に氷まくらる枕を砕いて、泣く児を揺ゆするは暴風雨あらしならずや。

母かいなは腕うでのなゆる時、父は沖なる暗夜の船に、雨と、波と、風と、艫ろと、雲と、魚と渦巻く活計なりわい。

津々浦々つづつ到る処、同じ漁師の世渡りしながら、南あたたかは暖ぬかに、北は寒ひとすじく、一条路いちじょうみちにも蔭かげひなた日向ひなたで、房州ぼうしゅうも西にしむき向むきの、館たてやま山やま北条きたじょうとは事ことかわり、その裏側なる前原まへがら、鴨かも川がわ、古川ふるがわ、白子しろこ、忽ごとと戸となど、

就^{なかんづく}中、船幽靈^{ふなゆうれい}の千倉が沖、江見和田などの海岸は、風に向いたる白帆の外には一重^{ひとえ}の遮るものもない、太平洋の吹通し、人も知つたる荒磯^{ありそうみ}海。

この一軒屋は、その江見の浜の波打際に、城の壁とも、石垣とも、岸を頼んだ若木の家造り^{やづく}、近ごろ別家をしたばかりで、葺いた茅^{かや}さえ浅みどり、新藁^{しんわら}かけた島田が似合おう、女房は子持ちながら、年紀^{とし}はまだ二十二三。

去年ちようど今時分、秋のはじめが初産^{ういざん}で、お浜といえ^{いさご}ば砂さえ、敷妙^{しきたえ}の一粒種^{ひとつぶだね}。日あたりの納戸に据えた枕蚊帳^{まくらがや}の蒼^{あお}き中に、昼の蛍の光なく、すやすやと寐入^{ねい}っているが、可愛らしさは四辺^{あたり}にこぼれた、畳も、縁も、手遊^{おもちゃ}、玩弄物^{おもちゃ}。

犬張子いぬはりこが横に寝て、起上りこぼし小法師のころりと坐すわった、縁台に、
 はりもの板を斜めにして、添乳そえちの衣紋えもんも繕つくろわず、姉あねさんかぶりを
 軽くして、襷たすきがけの二の腕うであたり、日ひざしに惜おしげ気なけれども、都
 育ちの白やかに、紅絹もみの切きをびたびたと、指を反さらした手の捌さばき、
 波の音のしらべに連れて、琴の糸いとを辿たどるよう、世帯染よみたがなお
 優しい。

秋日和の三時ごろ、人の影より、黍きびの影、一つ赤蜻蛉あかとんぼの飛ぶ
 向うの畝あぜを、威勢いきせの可いい声。

「号外、号外。」

「三ちゃん、何の号外だね、」

と女房は、毎日のように顔を見る同じ漁場りようばの馴染なじみの奴やつこ、張もはりのにうつむいたまま、徒然つれづれらしい声を懸ける。

片手を懐中ふとこへ突込んで、どう、してこました買喰かいぐいやら、一

番蛇のを呑んだ袋を懐中ふとこ。微塵棒みじんぼうを縦にして、前歯でへし折つ

て嚙かじりながら、縁台の前へによつきりと、吹矢が当って出たよう

な福助頭に向う顛卷はちまき。少兀すこはげの紺の筒袖つつそで、どこの媽々衆かかあしゅちらに貰

ったやら、浅黄あさぎの扱帯しごきの裂けたのを、繩ゆに振よった一重ひとえまわし、小

生意氣しりさに尻下り。

これが親仁おやじは念仏ねんぶつ爺じいで、網の破れを繕つくろううちも、数珠じゆずを放

さず手にかけてながら、葎むぐらの中の小窓の穴から、隣の柿の木、裏の屋根、鳥をじろりと横目に覗のぞくと、いつも前はだけの胡坐あぐらの膝ひざへ、台尻重く引つけ置く、三代相伝の火繩銃、のツそりと取上げて、フツと吹くと、ぱツと立つ、障子のほこりが目に入つて、涙は出ても、狙ねらいは違えず、真ま黒な羽をばさりと落して、奴やつこ、おさえろ、と見向みむきもせず、また南無阿弥陀なむあみだで手内職。

晩のお菜かぜに、煮たわ、喰かつたわ、その数三万三千三百さるほどに爺じいの因果いんぐわが孫むくに報むかつて、渾名あだなを小鳥こがらすの三之助、数え年十三の大柄わっぱな童わらわでござる。

搔垂かきたれ眉を上と下、大きな口で莞爾にっこりした。

「姉様あねさん、己おらの号外だよ。今朝、号外に腹が痛んだで、稲葉丸さ

号外になまけただが、直きまた号外に治つただよ。」

「それは困つたねえ、それでもすつかり治つたの。」と紅絹切もみぎれの小耳を細かく、ちよいちよいちよいと伸のばしていう。

「ああ号外だ。もう何ともありやしねえや。」

「だって、お前さん、そんなことをしちやまたお腹が悪くなるよ。」

「何をよ、そんな事ツて。なあ、姉様あねさん、」

「甘いものを食べてさ、がりがり嚙かじつて、乱暴じやないかねえ。」

「うむ、これかい。」

と目を上うわぎまに細ゆすうして、下唇をぺろりと嘗なめた。肩も脛すねも懐も、がさがさと袋を揺ゆすつて、

「こりや、何よ、何だぜ、あのう、己が嫁さんに遣ろうと思つて、
 姥が店おんばで買つて来たんで、旨うまそうだから、しよこなめたい。たつ
 た一ツだな。みんな嫁さんに遣るんだぜ。」

とくるりと、はり板に並んで向むきをかえ、縁側に手を支ついて、納
 戸の方を覗のぞきながら、

「やあ、寝てやがら、姉様あねさん、己が嫁さんは寝ねかな。」

「ああ、今しがた昼寝をしたの。」

「人情がないぜ、なあ、己が旨いものを持つて来るのに。」

ええ、おい、起きねえか、お浜こツ児。へ、」

とのめずるように頸うなじを窘すくめ、腰を引いて、

「何にもいわねえや、蠅はえばかり、ぶんぶんいつてまわつてら。」

「ほんとに酷いひどい蠅ねえ、蚊が居なくツても昼間だつて、ああして蚊帳へ入れて置かないとね、可哀かわいそうなように集たかるんだよ。それにこうやって糊のりがあるもんだからね、うるさいツちやないんだもの。三ちゃん、お前さんの許とこなんぞも、やつぱりこうかねえ、浜へはちつとでも放れているから、それでも幾いく干くらか少なからうねえ。」

「やつぱり居ら、居るどころか、もつと居ら、どしこと居るぜ。一つかみ打ふんづかめ捕かめえて、岡田おかだ螺にしとか何とかいって、お汁つけの実にしたいようだ。」

とけろりとして真顔にいう。

こんな年していうことの、世帯じみたも暮向き、塩焼く煙も
 ひとつら
 一列に、おなじ霞かすみの藁屋同士と、女房は打微笑み、
うちほほえ

「どうも、三ちゃん、感心に所帯じみたことをおいいだねえ。」
 奴やつこは心づいて笑い出し、

「ははは、所帯じみねえでよ、姉さんあね。こんのお浜ツ子が出来て
 から、己おらなりたけ小遣こづかいはつかわねえ。吉や、七と、一いちもん 銭せんこを
 遣やつてもな、大事に気をつけてら。玩弄物おもちゃだのな、飴あめだのな、い
 ろんなものを買つて来るんだ。」

女房は何となく、手拭てぬぐいの中に伏目うちふしめになって、声の調子も沈み

ながら、

「三ちゃんは、どうしてそんなだろうねえ。お前さんぐらいな年としかつこう紀恰好じや、小児こどもの持っているものなんか、引奪ひったくつても自分が欲ほしい時だのに、そうやってちつとずつ皆みんなから貰もらうお小遣で、あの児こに何か買つてくれてさ。姉ねえさん、しみじみ嬉しいけれど、ほんとに三ちゃん、お前さん、お食あがりなら可いい、気の毒でならないもの。」

奴やつこは嬉しそうに目を下げて、

「へへ、何、ねえだよ、気の毒な事はちつともねえだよ。嫁さんが食べる方が、己おらが自分で食べるより旨うまいんだからな。」

「あんなことをいうんだよ。」

と女房は顔を上げて莞爾にっこりと、

「何て情があるんだらう。」

熟じつと見られて独ひとりで頷うなずき、

「だって、男は誰でもそうだぜ。兄哥あにやだってそういわあ。船で暴風雨らしに濡れてもな、屋根代の要らねえ内で、姉あねさんやお浜こツ児が雨露に濡れねえと思や、自分が寒い気はしねえとよ。」

「嘘うそばツかり。」

と対手あいてが小児こどもでも女房は、思わずはつと赧あからむ顔。

「嘘じゃねえだよ、その代かわりにや、姉さんもそうやって働いてるだ。

なあ姉さん、己おらが嫁さんだって何だぜ、己が漁に出掛けたあと

じゃ、やっぱり、張はりものをしてくんねえじゃ己いや厭いやだぜ。」

「ああ、しましようにも、しなくつてさ、おほほ、三ちゃん、何を張るの。」

「え、そりや、何だ、またその時だ、今は着たツきりで何にもねえ。」

と面くらつた身のまわり、はだかつた懐ふところ中から、ずり落ちそうな菓子袋を、その時縁へ差置くと、鉄砲玉が、からからから。

「号外、号外ツ、」と慌あわただしく這身はいみで追掛けて平手で横ざまにポンと払はたくと、ころりとかえるのを、こつちからも一ツ払いて、くるりとまわして、ちよいとすくい、

「は、」

とかけ声でポンと口。

「おや、御馳走様ねえ。」
ごちそうさま

三之助はぐツと呑^のんで、

「ああ号外、」と、きよとりとする。

女房は濡れた手をふらりとさして、すツと立った。

「三ちゃん。」

「うむ、」

「お前さん、その三尺は、大層色気があるけれど、余りよれよれになったじゃないか、ついでだからちよいとこの端へはつておいて上げましょう。」

「何こんなものを。」

とあとへ退^{すさ}り、

「いまに解きます縺子の帯……」

奴は聞き覚えの節になり、中音でそそりながら、くるりと向うむきになったが早いのか、ドウとしたたかな足踏して、

「わい！」

ひなた

日向へのツそりと来た、茶の斑犬が、びくりと退つて、ぱつと砂、いや、その遁げ状の慌しさ。

四

「状ざまを見る、弱虫め、誰だと思うえ、小鳥の三之助だ。」
と呵から々と笑つて大得意。

「吃驚するわね、唐突に怒鳴つてさ、ああ、まだ胸がどきどきする。」

はツと縁側に腰をかけた、女房は草履の踵を、清くこぼれた棲つまにかけ、片手を背後うしろに、あらぬ空を視ながめながら、俯うつむ向き通しの疲つかれもあつた、頻しきりに胸を撫なで擦さする。

「姉あねさんも弱虫だなあ。東京から来て大尽のお邸やしきに、棲ひきを引摺ずつていたんだから駄目だ、意気地はねえや。」

女房は手拭を搔かい取つたが、目まぶちのあたりほんのりと、逆のほ上ぼせた耳にもつれかかる、おくれ毛を撫なででながら、

「厭いやな児こだよ、また裾すそを、裾すそをツて、お引摺りのようで人聞ひききが悪いわね。」

「錦にしきえ絵あねさまの姉様だあよ、見ねえな、皆みんな引摺ひきずつてら。」

「そりや昔のお姫様さ。お邸は大尽の、稲葉様の内だつて、お小間づかいなんだもの、引摺ひきずつてなんぞいるものかね。」

「いまに解きます縷しゆす子の帯とけつかるだ。お姫様だつて、お小間使だつて、そんなことは構わねえけれど、船頭のおかみさんが、そんな弱虫じゃ不可いけねえや、ああ、お浜こッ児こはこうは育てたくないもんだ。」と、機械があつて人形の腹の中で聞えるような、顔には似ない高慢さ。

女房は打笑みつつ、向直つて顔を見た。

「ほほほ、いうことだけ聞いていると、三ちゃんは、大層強そうだけれど、その実意気地なしツたらないんだもの、何よ、あれは

？」

「あれはツて？」と目をぐるぐる。

「だって、源次さん千太さん、理右衛門爺さんなんか来ると：
 …お前さん、この五月ごろから、粹いきな小鳥といわれないで、ベソ
 を搔いた三之助だ、ベソ三だ、ベソ三だ。ついでに鯨ほらと改名しろ
 なんて、何か高慢な口をきく度に、番こごと籠められておいでじゃ
 ないか。何でも、恐こわいか、辛こいかしてきつと沖で泣いたんだよ。
 この人は、」とおかしそうに正まむき向に見られて、奴やつこは、口をむぐむ
 ぐと、顛はちまき巻をふらりと下げて、

「へ、へ、へ。」と俯向いて苦笑い。

「見たが可いい、ベソちゃんや。」

と思わず軽く手をたたく。

「だつて、だつて、何だ、」

と奴は口惜やっこしくやそんな顔色で、

「己おらぐらいな年紀としで、鮪まぐろ船ぶねの漕こげる奴は沢山やっねえぜ。

ここいらの鼻はな垂なしは、よう磯いそだつて泳いげようか。たかだか

堰せきでめだかを極きめるか、古川の浅い処ところで、ばちやばちやと鮒ふなを遣やるだ。

浪打際なみうちといつたつて、一ひとつ畝うねり乗のつて見みねえな、のたりと天上

まで高たかくなつて、嶽たけの堂どうは目の下しただ。大風呂敷おほいそぎの山やまじやねえが、

一波越なみこすと、谷底やみぞよ。浜はまも日本にっぽんも見みえやしねえで、お星おほし様が映うつり

そうで、お太陽おたいよう様さまは真ま蒼さおだ。姉あねさん、風かぜの可いい日ひでそうなん

だぜ。

処を沖へ出て一つ暴風雨しげと来るか、がちやめちやの真暗まっくらやみで、浪だか滝だか分らねえ、真水と塩水をちやんぽんにがぶりと遣つちや、あみの塩からをペロペロとお茶の子で、鼻唄を唄うんだい、誰が沖へ出てベソなんか。」

と肩を怒らして大手を振った、奴やつこ、おまわりの真似まねして力む。

「じゃ、何なんだつて、何だつてお前、ベソ三なの。」

「うん、」

たちまち妙な顔、けろけろと擬勢の抜けた、顛卷はちまきをいじくりながら、

「ありやね、ありやね、へへへ、号外だ、号外だ。」

五

「あれさ、ちよいと、用がある、」

と女房は呼止める。

奴は遁げ足やっこにを向うのめりに、うしろへ引かれた腰附こしつきで、

「だって、号外が忙しいや。あ、号外ツ、」

「ちよいと、あれさ、何だよ、お前、お待ちまちツてばねえ。」

衝つと身を起こして追おうとすると、奴は駈出やっこした五足いっあしばかり

を、一飛びに跳ね返つて、ひよいと踞しゃがみ、立つた女房の前まえ垂たれの

あたりへ、円い頤あご、出額おでこで仰いで、

「おい、」という。

出足へ唐突だしぬけに突屈つっかがまれて、女房の身は、前へしなないそうになつて蹠踉よろめいた。

「何だねえ、また、吃驚びっくりするわね。」

「へへへ、番ごとだぜ、弱虫やい。」

「ああ、可いいよ、三ちゃんいは強うございますよ、強いからね、前は強いからそのベソを搔いたわけをお話しよ。」

「お前は強いからベソを搔いたわけ、」と念のためいつてみて、瞬またたきした、目が渋いそう。

「不可いねえや、強いからベソをなんて、誰が強くつてベソなんか搔くもんだ。」

「じゃ、やっぱり弱虫じゃないか。」

「だって姉さん、ベソも搔かざらに。夜一夜亡念の火が船につい

て離れねえだもの。理右衛門なんざ、己がベソをなんていう口で、

ああ見えてその時はお念仏唱えただ。」と強がりたさに目を睜る。

女房はそれかあらぬか、内々危んだ胸へひしと、色変るまで聞

きとが
咎め、

「ええ、亡念の火が憑いたって、」

「おっと、……」

とばかり三之助は口をおさえ、

「黙ろう、黙ろう、」と傍を向いた、片頬に笑を含みながら吃

驚したような色である。

秘すほどなお聞きたさに、女房はわざとすねて見せ、

「可いとも、沢山たんとそうやってお秘しな。どうせ、三ちゃんは他人

だから、お浜の婿さんじゃないんだから、」

と肩を引いて、身を斜め、振り切りそうに袖そでを合わせて、女房は背向そがいになンぬ。

奴やつこは出る杭くいを打つ手つき、ポンポンと天窗あたまをたたいて、

「しまった！ 姉あねさん、何も秘すというわけじゃねえだよ。

こんの兄哥あにきもそういうし、乗組んだ理右衛門徒でええも、姉さんに
は内証うちしるしにしておけ、話すと恐怖こわがるツていうからよ。」

「だから、皆みんなで秘すんだから、せめて三ちゃんが聞かせてくれた
つて可いじゃないかね。」

「むむ、じゃ話すだがね、おらが饒舌しやべつたつて、皆みんなにいつちや不可けねえだぜ。」

「誰が、そんなことをいうもんですか。」

「お浜こツ児こにも内証こだよ。」

と密そつと伸上そつつてまた縁側そつから納戸そつの母衣ほろ蚊帳がやを差さ覗しのぞく。

「嬰あかんぼ児ごが、何を知しつてさ。」

「それでも夢に見て魘うなされら。」

「ちよいと、そんなに恐怖こわい事ことなのかい。」と女房にようばうは縁えんの柱はしらにつかまつた。

「え、何、おらがベソを搔かいて、理右衛門りえいもんが念仏ねんぶつを唱となえたくらいな事ことだけんども。そら、姉あねさん、この五月ごご、三日流さんじつりゅうしの鯉かつおぶね船ふね

で二晩沖で泊ったつけよ。中の晩の夜中の事だね。

野だも山だも分んねえ、ぼつとした海の中で、おそ晩めに夕飯を食ったあとでよ。

昼間ツからの霧雨がしとしと降りになって来たで、みんな皆胴の間まへもぐつてな、そんな時に千太どんが漕こがしつけえ。

急に、お寒い、お寒い、かぜあげく風邪揚句だ不精しよう。誰ぞかわんなはらねえかって、とも艫からドンと飛下りただ。

船はぐらぐらとしただがね、それで止まるような波じゃねえだ。どんぶりこっこ、すっこっこ、おか陸へ百里やら五十里やら、方角も何も分らねえ。」

女房は打うちうなず頷いた襟さみしく、ち乳の張る胸をおさえたのであ

る。

六

「晩飯の菜に、塩からさ嘗め過ぎた。どれ、糠雨でも飲むべい、
とつてな、理右衛門どんが入交わつて漕がしつけえ。

や、おぞいな千太、われ、えてものを見て逃げたな。と臚で爺
さまがいわつしやるとの、馬鹿いわつしやい、ほんとうに寒気が
するだつて、千太は天窓から襦袢被つてころげた達磨よ。

ホイ、ア、ホイ、と浪の中で、幽に呼ばる声があるだね。

どこからだか分んねえ、近いようにも聞えれば、遠いようにも

聞えるだ。

来やがった、来やがった、陽気が悪いとおもつたい！ おらも
 どうも疝せんき気がきざした。さあ、誰ぞ来てやつてくれ、ちつと踞しゃがま
 ねえじゃ、筋張つてしよ事がない、と小半こはんとき時でまた理右衛門じい爺
 さまが潜つただよ。

われ漕こげ、頭痛だ、汝きさま漕げ、脚かつけ気だ、と皆みんな苦い顔をして、出人
 がねえだね。

平胡ひらあぐら坐でちよつと磁石さ見さしつけえ、此家ここの兄哥あにやが、奴やつこ、
 汝てめえ漕げ、といわしつたから、何の気もつかねえで、船で達者な
 は、おらばかりだ、おつとまかせ。」と、奴やつこははちまき願卷の輪を大き
 く腕いっぱいに占める真似して、

「いきなりとも艦へ飛んで出ると、船が波の上へ橋にかかつて、雨ですべ迂るといふもんだ。

どツこいな、と腰を極めたが、ずツしりと手答えして、櫂の大木根こそぎにしたほどなおおき大い艦の奴やつ、のツしりと掻いただがね。雨がしよぼしよぼと顛巻に染みるばかりで、空だか水だか分らねえ。はあ、昼間見る遠い処の山の上を、ふわふわと歩ある行くようで、底が轟々と沸ごうごうえくり返るだ。

ア、ホイ、ホイ、アホイと変な声が、真ま暗くらな海にも隅があつてその隅の方から響いて来ただよ。

西さ向けば、西の方、南さ向けば南の方、何でもおらがの向いた方で聞えるだね。浪の畝うねると同おんなじ一に声が浮いたり沈んだり、

遠くなつたりな、近くなつたり。

その内ぼやぼやと火が燃えた。船から、沖へ、ものの十四五町と真黒な中へ、ぶくぶくと大きな泡が立つように、ぼつと光らあ。

やあ、火が点れたいツて、おらあ、吃驚して喚くとな、……姉さん。」

「おお、」と女房は變つた声音。
「黙つて、黙つて、と理右衛門爺さまが胴の間で、苦の下でいわつしやる。」

また、千太がね、あれもよ、陸の人魂で、十五の年まで見ねえけりや、一生逢わねえというんだが、十三で出つくわした、奴

は幸福よ、と吐くだあね。

おらあ、それを聞くと、艫づかを握った手首から、寒くなつた

あ。」

「……まあ、厭じやないかね、それでベソを搔いたんだね、無理はないよ、恐怖いわねえ。」

とおくれ毛を風に吹かせて、女房も悚然とする。奴の顔色、赤蜻蛉、黍の穂も夕づく日。

「そ、そんなくれえで、お浜ツ児の婿さんだ、そんなくれえでベソなんか搔くべいか。」

炎というだが、変な火が、燃え燃え、こつちへ来そうだで、漕ぎ放すべいと艫をおしただ。

姉さん、そうすると、その火がよ、大方浪の形だんべい、おらが天窓あたまより高くなったり、船底へ崖がけが出来るように沈んだり、ぶよぶよと転げやあがつて、船脚へついて、海蛇ののたくるようについて来るだ。」

「……………」

「そして何よ、ア、ホイ、ホイ、アホイと厭な懸声かたがよ、火の浮く時は下へ沈んで、火の沈む時は上へ浮いて、上下うえしたに底澄そこずんで、遠いのが耳について聞えるだ。」

七

「何でも、はあ、おらと同じように、誰かその、炎さ漕いで来る
だがね。」

傍へ来られてはなんねえだ、と艀づかを刻んで、急いでしやく
ると、はあ、不可え。

向うも、ふわふわと疾くなるだ。

こりや、なんねえ、しよことがない、ともう打ちやらかして、

おさえて突立ってびくびくして見ていたらな。やつぱりそれでも、

来やあがつて、ふわりとやって、鳥のように、舳の上へ、水際さ

離れて、たかったがね。一あたり風を食つて、向うへ、ぶくぶく

とのびたつけよ。またいびつ形に円くなつて、ぼやりと黄色い、

薄濁りの影がさした。大きな船は舳から胴の間へかけて、半分ば

かり、黄色くなつた。婦人おんながな、裾すそを拵ひぎげて、膝ひざを立てて、飛乗ひりつた形だつて。一ぱし大ききも大きいで、艀かたが上つて、向うへ重おもくなりそうだに、はや他愛もねえ軽いのよ。

おらあ、わい、というて、艀かたを放した。

そんな時だ、われの、顔は真ま蒼つさだ、そういう汝おめえの面つらは黄色いぜ、と苦とまの間で、てんでんがいつたあ。——あやかし火が通つたよ。

奴やつこ、黙つて漕こげ、何ともするもんじやねえツて、此家このの兄哥あにやが、いわつしやるで、どうするもんか。おら屈かがんでな、密そつとその火を見てやつた。

「ぼやりと黄色な、底の方に、うようよと何か動いてけつから。」
「えッ、何さ、何さ、三ちゃん、」と忙せわしく聞いて、女房ひさしは底の

陰。

日向ひなたの奴やつこも、暮れかかる秋の日の黄はばんだ中に、薄黒くもなんぬるよ。

「何だかちつとも分らねえが、赤目あかめ鰻ふぐの腸はらわたさ、引ずり出して、たたきつけたような、うようよとしたものよ。

どす赤いんだの、うす蒼あおいんだの、にちにち舳みよしの板にくつついでいるようだつけ。

すぼりと離れて、海へ落ちた、ぐるぐると廻っただがな、大の颯さつとのして、一浪ひとなみで遠くまで持つて行った、どこかで魚うおの目が光るようによ。

おらが肩も軽くなって、船はすらすらと迂すべり出した。胴の間じ

や寂りして、幽かに軀も聞えるだ。夜は恐ろしく更けただが、浪も平になつただから、おらも息を吐いたがね。

えてものめ、何が息を吐かせべい。

アホイ、アホイ、とおらが耳の傍でまた呼ばる。

黙つて漕げ、といわつしやるで、おらは、スウとも泣かねえだが、腹の中で懸声さするかと思つただよ。

厭だからな、聞くまいとして頭あ掉つて、耳を紛らかしていたつげが、畜生、船に憑いて火を呼ぶだとよ。

波が平だで、なおと不可え。火の奴め、苦なしでふわふわとしおつた、その時は、おらが漕いでいる艀の方へさ、ぶくぶくと泳いで来たが、急にぼやつと拡がった、狸の鞆丸八畳敷よ。

そこら一面、波が黄色に光つただね。

その中に、はあ、細長い、ぬめらとした、黒い島が浮いたつけ。あやかし火について、そんな晩は、鮫さめの奴が化けるだど……あとで爺じいさまがいわしつた。

そういや、目だつぺい。真ま赤な火が二つ空を向いて、その背中とつさきの突にら先に睨んでいたが、しばらくするとな。いまの化鮫ぼけざめめが、微塵みじんになつたように、大きい形はすぽりと消えて、百とも千とも数を知れねえ、いろんな魚うおが、すらすらすらすら、黄色な浪の上を渡りおつたが、化鮫めな、さまざまにして見せる。唐からの海だか、天竺てんじくだか、和蘭陀オランダだか、分ぶんんねえ夜中だつたけが、おらあそんな事で泣きやしねえ。」と奴やつこは一息に勇んでいったが、言ことばを途切

らし四辺あたりを視ながめた。

目の前なる砂山の根の、その向き合える猛獸は、薄すすきの葉とともに黒く、海の空は浪の末に黄をぼかしてぞ紅くれないなる。

八

「そうする内に、またお猿をやつて、ころりと屈かがんだ人間ぐれえに縮かまつて、そこら一面に、さつと暗くなつたと思うと、あやし火やつの奴め、ぶらぶらと裾すそに泡を立てて、いきについて畝うねつて来て、今度はおらが足の舵かじに搦からんで、ひらひらと燃えただよ。

おらあ、目を塞いだが、鼻なきの尖だ。鱸ともへ這はい上あがりそうな形よ、

それで片つぺら燃えのびて、おらが持っている艀ろをつかまえそうにした時、おらが手は爪の色まで黄色くなつて、目の玉もやつぱりその色に染まるだがね。だぶりだぶりふなべり舷へらさ打つ波も船も、黄色だよ。それでな、姉あねさん、金色になつて光るなら、金かねの船で大丈夫というもんだが、あやかしだからそうは行かねえ。

時々煙けむのようになつて船の形が消えるだね。浪が真ま黒くろに畝あつてよ、そのたびに化物め、いきをつけてまた燃えるだ。

おら一生懸命に、艀かきで搔かのめしてくれただけれど、火の奴は舵かじにからまりくさつて、はあ、婦人おんなの裾すそが巻きついたようにも見えれば、爺じいの腰こしがしがみついたようでもありよ。大きい鮫あじ鰯こが、腹の中へ、白張しらはり提灯ちようちん鵜う呑のみにしたようにもあつた。

こん畜生、こん畜生と、おら、じだんだを踏ふんだもんだで、舵
 へついたかよ、と理右衛門爺いさまがいわつしやる。ええ、引ひから
 まつて点とれくさるだ、というたらな。よくねえな、一あれ、あれ
 ようぜ、と滅め入いつた声で松公がそういつけえ。

奴やつこや。

ひやあ。

そのあやし火の中を覗のぞいて見ろい、いかいこと亡もう者じやが居らあ、
 地獄さまの状さまは一見えだ、と千太どんがいうだあね。

小兒こどもだ、馬鹿をいうない、と此家ここの兄哥あにやがいわしつけ。

おら堪たまなくなつて、ベソを搔かき搔かき、おいおい恐怖こわくつて泣
 き出したあだよ。」

いわれはかくと聞えたが、女房は何にもいわず、唇の色が褪あせていた。

「苦とまを上げて、ぼやりと光つて、こんの兄哥の形がな、暗くらやみ中へ出さしつた。

おれに貸せ、奴やつこ寝ろい。なるほどうつとうしく憑つきやあがるツて、ハツと掌てのひらへ呼吸いきを吹かしつたわ。

一しけ来るぞ、騒ぐな、といつて艫まっすぐづかさ取つて、真直まっすぐに空を見さしつたで、おらも、ひとりでにすツこむ天窓あたまを上げて視ながめるとな、一面にどす赤く濁つて来ただ。波は、そこらに真黒まっくろな小山のような海坊主が、かさなり合つて寝てるようだ。

おら胴の間へ転げ込んだよ。ここにもごろごろと八九人さ、小

さくなつてすくんでいるだね。

どこだも知んねえ海の中に、船さただ一艘そうで、目の前さ、化物に取巻かれてよ、やがて暴風雨あらしが来ようというだに、活いきて働くのはこんの兄哥、ただ一人だと思や心細いけんどもな、兄哥は船頭、こんな時のお船頭だ。」

女房は引入れられて、

「まあ、ねえ、」とばかり深い息。

奴やつこは高慢に打傾き、耳に小さな手を翳かざして、

「轟げう——とただ鳴るばかりよ、長延寺様さ大釣鐘を半日あたま天窓から被かぶつたようだね。

うとうととこう眠つたつぺ。相撲を取つて、ころり投げ出され

たと思つて目さあけると、船の中は大水だあ。あかを汲み出せ、大変だ、と船も人もくるくる舞うだよ。

^{とま} 苦も何も吹飛ばされた、恐しい音ばかりで雨が降るとも思わね

え、^{あたま} 天窓から水びたり、真黒な海坊主め、船の前へも後へも、右

へも左へも五十三。ぬくぬくと肩さ並べて、手を組んで突立つ

たわ、手を上げると袖の中から、口い開くと^あ咽喉^{のど}から湧いて、真

^{つしろ} 白な水柱^{みずばしら}が、^{さかさま} 倒にざあざあと船さ目がけて突^{つつかか} 蒐る。

アホイ、ホイとどこだやら呼ばる声さ、あちらにもこちらにも耳について聞えるだね。」

「その時き、船は八丁はちちょうろ艦かんになつたがな、おららが呼ばる声じやねえだ。

やっぱりおなじ処かじに、舵かじについた、あやし火のあかりでな、影のような船の形が、薄ぼんやり、鼠色ねずいろして煙けむが吹いて消えるぐあい工合ぐあいよ、すツ飛んじやするすると浮ゆいて行く。

難ありがて有え、島が見える、着けろ着けろ、と千太ちたが喚わめく。やあ、どこのか船も漕こぎつけた、島がそこに、と理右衛門りえもん爺いさま。直じきさそこに、すすくと山の形さあらわれて、暗やみの中突貫つきぬいて大幅な樹の枝が、※のあいだに揺ゆぶれてな、帆柱ふしさ突立つたつて、波の上を泳いでるだ。

血迷つたかこいつら、爺様までが何をいうよ、島も山も、海の上へ出たものは石塊いしころ一ツある処じゃねえ。暗礁かくれいわへ誘い寄せ、連つれを呼ぶ幽霊船ゆうれいぶねだ。氣たしかを確たしかに持たつせえ、弱い音ねを出しやあがるなツて、此家こんの兄哥あにやが怒鳴るだけんど、見す見す天竺てんじくへ吹き流されるだ、地獄の土でも構わねえ、陸おかへ上あがつて呼吸いきが吐きたい、助け船——なんのつて弱い音さ出すのもあつて、七転八倒するだでな、兄哥まっすぐ真直まっすぐに突立つて、ぶるツと身震みふるいをさしつけえよ、突いきなり然すつぱだか素裸すつぱだかになつただね。」

「内の人が、」と声を出して、女房は唾つを呑のんだ。

「兄哥あにやがよ。おい。」

あやかし火き、まだ舵に憑ついて放れねえだ、天窓あたまから黄色に光

つた下腹へな、まぐるなわ 鮪縄ささ、ぐるぐると巻きつけて、その片端かたはじを、胴の間の横木へ結ゆわえつけると、さあ、念ばらしだ、娑婆しゃばか、地獄か見届けて来るツてな、ここさ、はあ、こんの兄哥あにやが、渾名あだなに呼ばれた海雀うみすずめよ。鳥のようにびらりと匆はねたわ、海の中へ、飛込むでねえ——真ま白っしろな波のかさなりかさなり崩れて来る、大きな山へ——駈かけ上あがるだ。

ひやくひろ 百尋つかばかり束ね上げた鮪縄ふなべりの、舷ふなべりより高かったのがよ、一ひとすく、掬とすくいにずツと伸のした！ その、十丈、十五丈、弓なりに上から覗のぞくのやら、反りかえって、睨にらむのやら、口さあげて威おどすのやら、蔽おほわりかかって取り囲んだ、黒坊主たぢの立たぢはだかっている中へ浪なみに揉もまれて行かしつけえ、船の中ではその綱を勝手に取って、理

右衛門爺さま、その時にお念仏だ。

やっと時が立って戻ってござった。舷へ手をかけて、神様のよ
うな顔を出して、何にもねえ、八方から波を打つけるぶッ暗礁かくれいわが
あるばかりだ、迷うな、ツていわしった。

お船頭、御苦労じゃ、御苦労じゃ、お船頭と、皆握みんなぎりこぶし拳で拝
んだだがね。

坊主も島も船の影も、さらりと消えてよ。そこら山のような波
ばかり。

急に、あれだ、またそこらじゆう、空も、船も、人の顔も波も
大きい大きい海の上さ半分仕切って薄黄色になったでねえか。

ええ、何をするだ、あやかしめ、また拡がったなツて、皆みんなくそ

焼けに怒鳴ったつけえ。そうじゃねえ、東の空さお太陽さまが
 上あがらつしたが、そこでも、姉あねさん、天と波と、上うえ下したへ放れただ。
 昨夜、化ゆうべ鮫ぼけざめの背中出したように、一面の黄色な中に薄はぼんやり
 黒いものがかかったのは、嶽たけの堂が目の果はてへ出て来ただよ。「

女房はほつとしたような顔かお色つきで、

「まあ、可よかつたねえ、それじゃ浜へも近かつたんだね。」

「思ったよりは流されていねえだよ、それでも沖へ三十里ばかり
 出ていたつぺい。」

「三十里、」

とまた驚いた状さまである。

「何だなあ、姉あねさん、三十里ぐれえ何でもねえや。」

それで、はあ夜が明けると、黄色く環^わどつて透通^{てう}つたような水と天との間さ、薄あかりの中をいろいろな、片手で片身の奴^{やつ}だの、首のねえのだの、蝦^が蟄^まが呼吸吹くようなのだの、犬の背中へ炎さ絡^{から}まつているようなのだの、牛だの、馬だの、異^い形^ぎなものが、影^{かげ}燈^{とう}籠^{ろう}見るようにふわふわまよつて、さつさと駈^いけ^ぎ抜^けけてどこかへ行^ゆくだね。」

十

「あとで、はい、理^り右^え衛^む門^じ爺^いさまもそういつけえ、この年になるまで、昨^{ゆう}夜^べぐれえ執^{しゆう}念^{ねん}深^{ふけ}えあやかしの憑^ついた事はねえだつて。

姉さん^{あね}。

何だつて、あれだよ、そんなに夜があけて海のぼけものどもさ、
 するする駈^かけ出して失^うせるだに、手許^{てもと}が明^{あかる}くなって、皆^{みんな}の顔^つが土^ちちけいろ
 気色^{ちけいろ}になつて見えてよ、艀^ろが白うなつたのに、舵^{かじ}にくいついた、
 えてものめ、まだ退^のかねえだ。

お太陽^{てんとう}さまお庇^{かげ}だね。その色が段々蒼^{あお}くなつてな、ちつとず
 つ固^{かた}まつて搔^かいすくまつたようだつけや、ぶくぶくと裾^{すそ}の方が水
 際^{ぎわい}で膨^ふれたあ、蛭^{ひる}めが、吸^ふい肥^{ふと}つたようになって、ほとりの波^{なみ}の
 上^{うへ}へ落ちたがね、からからと明^あくなつて、蒼黒^{あせろ}い海^{うみ}さ、日^ひの下^{した}で
 突張^{つっぱ}つて、匆^はねてるだ。

まあ、めでてえ、と皆^{みんな}で顔^{かほ}を見たつけや、めでてえはそればか

りじやねえだ、姉さんも、新しい衣物きものが一枚出来たつぺい、あんな時の鯉かつおさ、今年中での大漁だ。

舳みよしに立つて釣らした兄あにや哥からだの身のまわりへさ、銀の鯉かつおが降つた

つけ、やあ、姉さん。」

と暮れかかる蜘蛛くもの囿いの檐のきを仰やいだ、奴やつこの出額おでこは暗くかつた。

女房にようばうもそれなりに咽喉のどほの白あおむう仰あおむ向むいて、目を閉じて見る、胸うららの中の覚え書。

「じや何だね、五月雨さみだれ時じぶん分、夜中からあれた時だね。

まあ、お前さんは泣き出すし、爺おやさまもお念仏をお唱えだつて。内の人はその恐おそしい浪なみの中で、生命いのちがけで飛と込んでさ。

私はただ、波なみの音ねが恐おそしいので、宵よから門かどへ鎖じようをおろして、奥

でお浜と寝たつけ、ねえ。

どんな烈はげしい浪が来ても裏の崖がけは崩れない、鉄の壁だ安心しろ
ツて、内の人がおいいだから、そればかりをたよりにして、それ
でもドンと打ぶつかるごとに、崖と浪とで戦いくさをする、今打った大砲
で、岩が破れやしまいかと、坊やをしつかり抱くばかり。夜中に
乳のかれるのと、寂よしいばかりを慾よくにして、冷つめたいとも寒いとも思
わないで寝ていたのに、そうだったのか、ねえ、三ちゃん。

そんな、荒浪だの、恐おそしいあやかし火とやらだの、黒坊主だの、
船幽霊ふなゆうれいだのの中で、内うちの人は海から見りや木この葉はのような板一
枚に乗っていてさ、」と女房は首垂うなだれつつ、

「私にや何にもいわないんだもの……」と思わず襟ひとしずくに「一ひとしずく、

ほろりとして、

「済まないねえ。」

奴はやっこ何の仔細しさいも知らず、慰め顔に威勢のいい声、

「何も済まねえツて事ことアありやしねえだ。よう、姉あねさん、お前に寒かつたり冷たかつたり、辛い思いさ、さらせめえと思うだから、兄あにや哥やがそうして働くだ。おらも何だぜ、もう、そんな時さあつたつてベソなんか搔きやしねえ、お浜ツ子の婿さんだ、一所に海へ飛込むぜ。

そのかわり今もいっけえよ。兄あにや哥やのために姉さんが、お膳ぜん立てしたり、お酒買つたりよ。

おら、酒は飲まねえだ、お芋でいいや。

よツしよい、と鯉さ積んで波に乗込んで戻つて来ると、……浜に煙が靡なびきます、あれは何ぞと問うたれば」

と、いたいけに手をたたき、

「石いし々いし合わせて、塩く汲くんで、玩おも弄ちやのバケツでお芋煮かじて、かじ

めをちよろちよろ焚たくわいのだ。……よう姉あねさん、」

奴やつこは急にぬいと立ち、はだかつた胸を手で仕切つて、

「おらがここまで大きくなって、お浜ツ子が浜へ出て、ままするはいつだろうなあ。」

女房は夕露の濡れた目許の笑顔優しく、

「ああ、そりやもう今日明日という内に、直きに娘になるけれど、あの、三ちゃん、」

と調子をかえて、心ありげに呼びかける。

十一

「ああ、」

「あのね、私は何も新しい衣物きものなんか欲しいほしとは思わないし、坊やも、お菓子も用いらないから、お前さん、どうぞ、お嬢さんになってくれる気なら、船頭はよして、何ぞ他ほかの商売しょうばいにしておくね、姉ねえさん、お願いだがどうだろうね。」

と思ひ入ったか言ことばもあらため、縁に居ゐずまいもなおしたのである。

やつこ
 奴は遊び過ぎた黄昏たそがれの、鴉からすの鳴くのをきよるきよる聞いて、

浮足うわに目も上つき、

「姉あねさん、稲葉丸は今日さ日帰りだつぺいか。」

「ああ、内でもね。今日は晩方までに帰るつて出かけたがね、お聞きよ、三ちゃん、」

とそわそわするのをおさ圧えていったが、奴やつこはよくも聞かないで、

「姉あねさんこそ聞きねえな、あらよ、堂たけの嶽たけから、鳥が出て来た、カオ、カオもねえもんだ、盗賊どろぼうをする癖くせにしやあがつて、漁いしさえ当ると旅をかけて寄つて来やがら。」

姉さん船が沖へ来たぜ、大漁だ大漁だ、」

と鳥の下で小さく躍る。

「じゃ、内の人も帰って来よう、三ちゃん、浜へ出て見ようか。」
と良人の帰る嬉しさに、何事も忘れた状で、女房は衣紋を直した。
「まだ、見えるような処まで船は入りやしねえだよ。見させえ。
そこらの柿の樹の枝なんか、ほら、ざわざわと鳥めい、えんこを
して待つてやがる。」

五六里の処、嗅ぎつけて来るだからね。ここらに待つていて、
浜へ魚の上るのを狙うだよ、浜へ出たつて遠くの方で、船はやつ
とこの鳥ぐれえにしか見えやしねえや。

やあ、見させえ、また十五六羽遣つて来た、沖の船は当つた
ぜ。

姉さん、また、着るものが出来らあ、チョツ、」

舌打の高慢さ、

「おらも乗って行きや小遣が貰えたに、号外を遣って儲け損な
った。お浜ッ児に何にも玩弄物が買えねえな。」

と出額をがツくり、爪尖に蠣殻を突ツかけて、赤蜻蛉の
散ったあとへ、ぼたぼたと溢れて映る、烏の影へ足礫。

「何をまたカオカオだ、おらも玩弄物を、買お、買おだ。」

黙って見ている女房は、急にまたしめやかに、

「だからさ、三ちゃん、玩弄物も着物も要らないから、お前さん、
漁師でなく、何ぞ他の商売をするように心懸けておくんなさいよ。
」という声もうるんでいた。

奴ははじめて口を開け、けろりと真顔で向直って、

「何だって、漁師を止めて、何だって、よ。」

「だって、そんな様子じゃ、海にどんなものが居ようも知れない、ね、こわ怖いじゃないか。」

内の人や三ちゃんが、そうやって私たちを留守にして海へ漁をしに行ってる間に、あらしが来たり浪が来たり、そりやまだいいとして、もしか、あの海から上って私たちを漁しに来るものがあったらどうしよう。貝が殻へかくれるように、家へ入ってすく窘んでいても、向うが強ければ捉つかまえられるよ。お浜は嬰あかんぼ児だし、私はこうやって力がないし、それを思うとほんとに心細くつてならないんだよ。」

としみじみいうのを、呆あきれた顔して、聞き澄ました、奴やつこは上唇

を舌で嘗め、眈を下げて哄々とふき出し。

「馬鹿あ、馬鹿あいわねえもんだ。へ、へ、へ、魚が、魚が人間を釣りに来てどうするだ。尾で立ってちよこちよこ歩行いて、鰭で棹を持つのかよ、よう、姉さん。」

「そりや鰹や、鯖が、棹を背負って、そこから浜を歩行いて来て、軒へ踞むとはいわないけれど、底の知れない海だもの、どんなものが棲んでいて、陽気の悪い夜なんぞ、浪に乗って来ようも知れない。昼間だって、ここへ来たものは、——今日は、三ちゃんばかりじゃないか。」

と女房は早や薄暗い納戸の方を顧みる。

十二

「ああ、何だか陰気になって、穴の中を見るようだよ。」

とうら寂しげな夕間暮ゆうまぐれ、生干なまびの紅絹もみも黒ずんで、四辺あたりはもの磯いその風。

奴やつこは、旧来もとた黍きびがらの瘦やせた地蔵の姿して、ずらりと立並こみちぶ徑みちを見返り、

「もつと町の方へ引越して、軒がすとうへ瓦斯燈がすとうでも点つけるだよ、兄哥あにやもそれだから稼いそぐんだ。」

「いいえ、私や、何も今のくらしにどうこうと不足をいうんじやないんだわ。私は我慢をするけれどね、お浜かほが可哀かわいそうだから、

号外屋でも何んでもいい、他の商売ほかにしておくれって、三ちゃん、お前に頼むんだよ。内の人心配をすると悪いから、お前決して、何んにもいうんじゃないよ、可いいかい、解わかつたの、三ちゃん。」

と因果を含めるようにいわれて、枝の鴉からすうなすも領うき顔。

「むむ、じゃ何だ、腰に鈴をつけて駈かけまわるだ、帰かつたら一番、爺じいさま様と相談すべいか、だつて、お錢あしにやならねえとよ。」

と奴やつこは悄しよ乎こげて指を嚙かむ。

「いいえさ、今が今というんじゃないんだよ。突いきなり然なりそんな事をいっっちゃ不可いけないよ、まあ、話だわね。」

と軽くいって、気をかえて身を起した、女房は張はり板いたをそつと撫なで、

「慾張つたから乾き切らない。」

「何、姉あねさんが泣くからだ、」

と唐突だしぬけにいわれたので、急に胸がせまつたらしい。

「ああ、」

と片袖かたそでを目にあてたが、はツとした風で、また納戸を見た。

「がさがさするね、鴉が入りやしまいねえ。」

三之助はまた笑い、

「海から魚が釣りに来ただよ。」

「あれ、厭いや、驚おどかしちや……」

お浜がむずかつて、蚊帳かやが動く。

「そら御覧な、目を覚ましたわね、人を驚おどかすもんだから、」

と片頬かたほに莞爾にっこり、ちよいと睨にらんで、

「あいよ、あいよ、」

「やあ、目を覚さましたら密そつと見べい。おらが、いろツて泣かしちや、仕事の邪魔するだから、先刻さつきから辛抱してただ。」と、かごとがましく身を曲くねる。

「お逢あいなさいまし、ほほほ、ねえ、お浜、」

と女房は暗い納戸で、母衣蚊帳ほろがやの前みじろで身動みじろぎした。

「おっと、」

奴やつこは縁やっこに飛びついたが、

「ああ、跣足はだしだ姉あねさん。」

と脛すねをもじもじ。

「可いいよ、お上りよ。」

「だって、姉あねさんは綺麗きれいすぎだからな。」

「構かまわないよ、ねえ。」

といつて、抱こき上げた兎こに頬ほお摺すりしつつ、横に見向いた顔が白
い。

「やあ、もう笑つてら、今泣いた鳥からすが、」

と縁えん端はしに遠慮して遠くで顔をふつて、あやしたが、

「ほんとに騒々しい鳥だ。」

と急に大人びて空を見た。夕空にむらむらと嶽たけの堂を流れて出
た、一団の雲の正ただ中なかに、颯さつと揺れたようにドンと一発、ドドド、
ドンと波に響いた。

「三ちゃん、」

「や、また爺さまが鴉をやった。遊んでるツて叱られら、早くいつておさ圧えべい。」

「まあ、遊んでおいでよ。」

と女房は、胸の雪を、兎こに暖く解きながら、斜めに抱いて納戸口。

十三

「ねえ、今に内の人が帰ったら、菜のものを分けてお貰もらい、そうすりや叱られはしないからね。何だか、今日は寂しくツて、心細

くツてならないから、もうちつと、遊んで行つておくれ、ねえ、お浜、もうお父さんとつがお帰りだね。」

と顔に顔、兎こにいいながら縁へ出て来た。

おくれ毛の、こぼれかかる耳に響いて、号外——号外——とうら寂しい。

「おや、もういつてしまつたんだよ。」

女房は顔を上げて、

「小児こどもだねえ」

と独りでいったが、檐のきの下なる戸外おもてを透かすと、薄黒いのが立っている。

「何だねえ、人をだましてき、まだ、そこに居るのかい、此奴こいつ、」

と小児こどもに打ぶたせたそうに、つかつかと寄よつたが、ぎよつとして退すつた。

檐下の黒いものは、身の丈三之助の約三倍、朦朧もうろうとして頭つむりの円い、袖の平たい、入道であった。

女房は身をしめて、キと唇を結んだのである。

時に身じろぎをしたと覚おぼしく、イたんだ僧の姿は、張板はりいたの横へ

揺れたが、ちようど浜へ出るその二頭の猛獸まもに護まもられた砂山の横

穴のごとき入口を、幅一杯ふさに塞いで立つた。背高き形が、傍わきへ少

し離れたので、もう、とつぷり暮れたと思う暗さだった、今日は

まだ、一ひとすじ条海の空に残っていた。良人おととが乗った稲葉丸は、その

下あたりを幽かすかな横雲。

それに透すと、背のあたりへぼんやりと、どこからか霧が迫つて来て、身のまわりを包んだので、瘠せたか、肥えたか知らぬけれども、窪んだ目の赤味を帯びたのと、尖つて黒い鼻の高いのが認められた。衣は潮垂れてはいないが、潮は足あとのように濡れて、砂浜を海方へ続いて、且つその背のあたりが連りに息を吐くと見えて、戦っているのである。

心弱き女房も、直ちにこれを、怪しき海の神の、人を漁るべく海から顕われたとは、余り目のあたりゆえ考えず。女房は、ただ総毛立った。

けれども、厭な、気味の悪い乞食坊主が、村へ流れ込んだと思つたので、そう思うと同時に、ばたばたと納戸へ入つて、箆筒の

傍そばなる暗い隅へ、横よこざまに片かた膝ひざつくつと、忙せわしく、しかし、殆ほとんど無意識に、鳥ちようもく目を。

早く去いつてもらいたさの、女房は自分も急いで、表の縁へするすると出て、此方こなたに控えながら、

「はい、」

という、それでも声は優しい女。

薄黒い入道は目を留めて、その挙ふるま動いを見るときもなしに、此方こなたの起居たちいを知つたらしく、今、報謝をしようとしてと嬰兒あかごを片手に、掌てを差出したのを見も迎えないで、大儀らしく、かつたるそうに頭つむりを下に垂れたまま、緩ゆるく二ツばかり頭かぶりを掉ふつたが、さも横柄おうへいに見えるたのである。

また泣き出したを揺りながら、女房は手持無沙汰に清しい目を
 睜みはつたが、

「何ですね、何が欲ほしいんですね。」

となお物もの貫ぬいという念は失うせぬ。

ややあつて、鼠ねずみの衣ぬいの、どこが袖そでともなしに手首を出して、僧

は重いもののように指を挙げて、その高い鼻の下を指した。

指すとともに、ハツという息を吐つく。

渠かれ飢うえたり矣。

「三ちゃん、お起きよ。」

ああ居てくれれば可よかつた、と奴やつこの名を心ゆかし、女房は氣転
 らしく呼びながら、また納戸へ。

十四

強盗ごうとうに出逢であつたような、居ゐもせぬ奴やつこを呼よんだのも、我われながら、
それにさへ、動悸どうきは一倍高たかうなる。

女房にようばうは連しきりに心急こころせいて、納戸なうどに並ならんだ台所だいじょ口に片膝かひひざつきつつ、
飯櫃めしびつを引寄ひきよせて、及および腰こしに手桶ておけから水みづを結むすび、効かいがい
ちのみ かいな
嬰兒わがこを腕うでに抱かかいたまま、手許うわも上うへの空そらで覺束おぼつかなく、三ツさんばかり
にぎりめし
握にぎり飯めし。

潮風うしほで漆うるしの乾からびた、板いた昆布こんぷを折おつたような、折敷おしきにのせて、カ
タリと櫃びつを押遣おしやつて、立たてていた踵かかとを下くだへ、直ただぐに出いて來きた。

「少人数の内ですから、沢山はないんです、私のを上げますからね、はやく持つて行つて下さいまし。」

今度はやや近寄つて、僧の前へ、片手、縁の外へ差出すと、先つき刻口を指したまま、鱗うろこでもありそうな汚い胸のあたりへ、ふらりと釣つていた手が動いて、ハタと横を払うと、発奮はずみか、訝さえか、折敷ぐるみ、バツタリ落ちて、昔々、蟹かにを潰つぶした渋柿に似てころりと飛んだ。

僧はハアと息が長い。

余あまりの事に熟じつと視みて、我を忘れた女房、

「何をするんですよ。」

一足退きつつ、

「そんな、そんな意地の悪いことをするもんじゃありません、お前さん、何が、そう気に入らないんです。」

と屹きつといったが、腹立つ下に心弱く、

「御坊おぼうさんに、おむすびなんか、差上げて、失礼だとおっしやるの。」

それでは御膳おぜんにしてあげましょうか。

そうしましょうかね。

それでははじめから、そうしてあげるのだったんですが、手はなし、こうやって小児こどもに世話が焼けますのに、入相いりあいで忙せわしいもんですから。……あの、茄子なすのつき加減なのがありますから、それでお茶づけをあげましょう。」

薄暗がりに頷うなずいたように見て取った、女房は何となく心が晴れて機嫌よく、

「じや、そうしましょう。お前さん、何にもありませんよ。」
勝手へ後姿になるに連れて、僧はのツそり、夜が固かたまって入ったように、ぬいと縁側から上り込むと、表の六畳は一杯に暗くなつた。

これにギョツとして立淀たちよどんだけれども、さるにても婦人おんな一人。ただ、ちつとも早く無事に帰してしまおうと、灯をつける間まももどかしく、良人おととの膳を、と思うにつけて、自分の気の弱いのが口惜くやしかつたけれども、目を瞑ねむつて、やがて嬰兒ちのみを襟に包んだ胸を膨ふくらかに、膳を据えた。

「あの、なりたけ、早くなさいましよ、もう追ツつけ帰りましよ
う。内のはいつこくで、気が強いんでござんすから、知らない方
をこうやって、また間違いにでもなると不可いけません、ようござん
すか。」

と茶碗うづたかもに堆く装つたのである。

その時、間の四隅まを籠めて、真中まんなかどころ処こに、のツしりと大胡おおあぐ
坐らでいたが、足を向うざまに突き出すと、膳はひしやげたよう
に音もなく覆くつがえつた。

「あれえ、」

と驚いて女房は腰を浮かして遁にげさまに、裾すそを乱して、ハタと
手を支つき、

「何ですねえ。」

僧は大いなる口を開けて、また指した。その指で、かかる中にも袖で庇かばつた、女房の胸をじりりとさしつつ、

(児こを呉くれい。)

と聞いたと思うと、もう何にも知らなかった。

我に返つて、良人の姿を一目見た時、ひしと取とり継すつて、わなわなと震えたが、余り力強く抱いたせいか、お浜は冷つめたくなつていた。

こんな心弱いものに留守をさせて、良人が漁すなどる海の幸よ。

その夜はやがて、砂白く、崖がけ蒼あおき、玲れい瓏ろうたる江見の月に、奴やつこが号外、悲しげに浦を駈かけ廻まわつて、蒼わたつみ海の浪ぞ荒かりける。

明治三十九年（一九〇六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海異記

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>